

清代八股文における破題・承題の作成法について (6)

滝 野 邦 雄

(iv) 『文法小題濬靈秘書』

『文法小題濬靈秘書』(乾隆五十年〔一七八五〕樓季美序)では、承題をつぎのように解説する。

承題とは、破題の意を承明にするなり。破題は兩句なれば、止だ大意を包括す可し。承題は則ち破〔題〕を承^うけて説明す可し。其の格は三句・四句を以て主と為す。五六句に至れば則ち太^{はな}はだ長し。起句は「夫」字・「蓋」字・「甚矣」字を用う。「夫」字は、上意を承け指點するの辞なり。「蓋」字は、上意を承けて推原するの辞なり。「甚矣」字は、破〔題の〕意を承け懇切に之を言うなり。末には「乎」字・「哉」字・「耶」字・「坎(歟)」字を用う。「哉」字は、直截なり。「乎」字は、軽く揚がるなり。「耶」字は、軽くして婉なり。「坎(歟)」字は、疑いて未だ定まらざるなり。大約、承題は破題と相い関照するを要す。〔破題が〕正破なれば則ち〔承題は〕反承なり。〔破題が〕反破なれば則ち〔承題は〕正承なり。〔破題が〕順破なれば則ち〔承題は〕逆承なり。〔破題が〕逆破なれば則ち〔承題は〕順承なり。〔破題が〕分破なれば則ち〔承題は〕合承なり。〔破題が〕合破なれば則ち〔承題は〕分承なり。一起一伏 自ずから相い呼應す。破〔題〕をして自ずから破^とき、承〔題〕をして自ずから承^うけしむ可からざるを妙と為す。

〔承題は〕最も平頭^さを忌^さく。亦た合脚^さを忌^さく。凡そ〔承題の〕起句と破題の起句とが相い同じきを「平頭」と為す。末句と破題の末句とは相い同じきを「合脚」と為す。然れども「平頭」は避け易く、「合脚」は防ぎ難(難)し。

題目に上文有る者は、承題の第一句 必^{かなら}須^ず本題に従いて説き起こすべし。即ち上文を撇^{はら}い難(難)き者有れば、亦た須らく先ず本題を承けて上文を倒入^{まさ}すべし。方に題位をして乱れず〔適〕切に記さんとす。

破題は、聖賢・帝王・諸人に於いて須らく暗に講(悟らせる)ことを用うべし。承題は則ち之を直言す。堯・舜の如きは則ち「堯」・「舜」と直稱し、孔子は則ち「夫子」と直稱す。其餘の諸人は皆な題に依りて直稱し、復た避忌すること無し。承とは、接なり。上に接して下を生ず。圓傳にして滯らず・輕便にして飄逸なるを以て工と為す。

承題は、必^{かなら}須^ず開合^①し、議論 紆徐(婉曲でゆったりする)委曲(変化に富んで含蓄がある)すること、羊腸(古の坂道の名)の峻阪を登るが如く、一步一止して九たび嘆息させれば、方^{まさ}に佳し。蔡虛齋(蔡清:字は介夫、号は虚齋、諡は文莊。福建晉江の人。景泰四年(一四五三)～正德三年(一五〇八)。成化二十年甲辰科(一四八四)二甲七十三名の進士。『四書蒙引』の著者としても知られる) 嘗(嘗)て云う、若し承題もて一直に説き去けば、只だ是れ〔一〕

箇の「如」字の破題なるのみ、と（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十一葉～元四十二葉・「承題式」条）。

①開合：『制義綱目』に、「此の意を明らかにせんと欲し、先ず彼の意に即して以て之を發するを開と曰う。に彼の意を明らかにし、忽ち前の意に接し以て之を印するを合（闇）と曰う」（雍正六年刊『制義綱目』不分卷・題氣總論・「十日開合」条・二十九葉）。

承題は、破題で説かれたことを承けてそれを明かにするものである。破題は二句なので、ただ大意を包括するのみである。承題は、破題を承けて説き明らかにするものである。その形式は三句・四句を主なものとする。五六句ではきわめて長くなってしまう。第一句目のあたまには「夫」字・「盖」字・「甚矣」字を用いる。「夫」字は、上の意味を承けて指し示すの辞である。「盖」字は、上の意味を承けてそれを追求するの辞である。「甚矣」字は、破題の意味を承けて丁寧に言うものである。文末には「乎」字・「哉」字・「耶」字・「歟」字を用いる。「哉」字は、直截的な意味をあらわす。「乎」字は、軽やかで舞い上がる意味をあらわす。「耶」字は、軽やかでおだやかな意味をあらわす。「歟」字は、疑問を抱いて定まらない意味をあらわす。承題は破題と呼応することが求められる。破題が正破であれば、承題は反承とする。破題が反破であれば、承題は正承とする。破題が順破であれば、承題は逆承とする。破題が逆破であれば、承題は順承とする。破題が分破であれば、承題は合承とする。破題が合破であれば、承題は分承とする。破題と承題とを、起伏させて呼応させるのである。破題だけで題目を説き明かし、承題だけで題目を承けてしまわないものをすぐれたものとする。承題は、「平頭」と「合脚」を避ける。承題の第一句目と破題の第一句目が同じようになるのを「平頭」とする。承題の末句と破題の末句とが同じようになるのを「合脚」とする。ただ、「平頭」は避けやすいのであるが、「合脚」は防ぎ難いものである。題目に截去された上文がある場合は、必ず題目の主題にしたがって説き起こすべきである。もしも截去された上文が切り離して説き難いときでも、主題にもとづいてその上の部分に言及すべきである。題位（題目で要求されている内容）を乱さず適切に記述するのである。破題においては、聖賢・帝王・諸人は暗に悟らせるようにするが、承題ではそのまま記述する。堯・舜は、そのまま「堯」・「舜」と称し、孔子はそのまま「夫子」と称する。その他も、題目のいい方によって称して、避けることはしない。「承」とは接するの意味である。上に接して下を生ずるものである。まるく説いて滞らず・軽やかで飄逸であることを巧みなものとする。承題は、かならず開合し、議論は婉曲でゆったりしたうえに変化に富んで含蓄があること、曲がりくねった坂道が続くことで有名な羊腸坂を登るようにし、一歩ごとに止まり九度も嘆息させるようにして、はじめて巧みなものといえる。蔡虛齋（蔡清）はかつて「もしも承題を「屈折させることなく」一気に説いてゆけば、ただの「如」字ではじまる破題となってしまうだけだ」という、といった。

[用例]

題目：學而時習之（『論語』學而）単題

聖人以學勉天下，而先示以無間之功焉／夫人孰不學，而時習者鮮矣，誠時習之其功，不已深乎（聖人 學を以て天下に勉め，而して先ず示すに間^{へだ}つ無きの功を以てす／夫れ人 孰^{たれ}が學ばざらん，而して時に習う者は鮮し，誠に時に之を習う，其の功 已に深からざらんや）

[破題上句:] 「孳（學）」字を破く。[破題下句:] 「時習」を破く。

[承題一句:] なし。[承題二句:] 一句を正す。[承題三句:] なし（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十四葉・「破承題式」条）。

題目：事父母能竭其力（『論語』學而）単題

有力而不私，^①誠于事父母者也／夫人子之力即父母之力也，以父母之力竭之父母，其心可謂誠乎（力有りて私せざるは，父母に事うるに誠なる者なり／夫れ人の子の力は即ち父母の力なり，父母の力を以て之を父母に竭す，其の心 誠なりと謂う可し）

①『論語集注』學而「子夏曰，賢賢易色，事父母能竭其力…」条の朱注に「四者（賢賢・事父母・事君・與朋友）皆人倫之大者，而行之必盡其誠。學求如是而已（四者（賢賢・事父母・事君・與朋友）は皆な人倫の大なる者にして，之を行ないて必ず其の誠を盡す。學は是の如きを求むるのみ）」。

[破題上句:] 題面なり。[破題下句:] 題意なり。

[承題一句:] 此の如く打通すれば，方に竭さざる可からざる^{しめ}を見す。[承題二句:] 二句を正す。[承題三句:] ●一句（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十四葉・「破承題式」条）。

題目：君子不器（『論語』爲政）単題

君子有神於用者，以其體無不具也^②／蓋人必全乎其體，而後能全乎其用，德如君子，又安得以器名之（君子は用に神なる者有れば，其の體を以て具わらざるは無きなり／蓋し人 必ず其の體を全うし，而して後に能く其の用を全うす，德 君子の如きは，又た安んぞ得て器を以て之に名づけん）

①②『四書集注』論語・爲政・「君子不器」条の朱注に「器者，各適其用，而不能相通。成德之士，體無不具，故用無不周，非特爲一材一藝而已（器とは，各々其の用に適して，相い通ずる能わず。成德の士，體 具わらざるは無し，故に用 周^{あま}ねからざるは無し，特に一材一藝と爲すに非ざるのみ）」。

[破題上句:] 題面を破く。[破題下句:] 題意を破く。

[承題一句:] 題前●●●●。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十四葉～元四十五葉・「破承題式」条）。

題目：不恥下問（『論語』公冶長）単題

不自恃其位者、雖下問而不恥焉^①。夫以上而問下、而常情之所恥也、而文子則不恥焉、其虚心為何如哉（自から其の位を恃まざる者は、下問すと雖も恥じず。夫れ上を以て下に問うは、常情の恥ずる所なり、而して文子は則ち恥じず、其の虚心、何如と為すや）

①『四書集注』論語・公冶長・「公文子何以謂之文也」条の朱注に「凡人性敏者、多不好學。位高者、多恥下問（凡そ人の性の敏なる者、多く學を好まず。位高き者は、多く下問を恥ず）」。

[破題上句:] 題意なり。[破題下句:] 題面なり。

[承題一句:] [破題の] 二句[目を] 反承す。[承題二句:] [破題の] 一句[目を] 正承す。[承題三句:] 収(收)[句] は恃むの意有らず（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十五葉・「破承題式」条）。

題目: 仁者先難而後獲（『論語』雍也）単題

仁者以所難為先、而獲非所計矣^①。夫獲未嘗不在所難中也、而先於難（難）者獨後獲、所以為仁者之心（仁者は難き所を以て先と為し、而して獲るは計る所に非ず。夫れ獲るは未だ嘗て難き所の中に在らずんばあらざるなり、而して難（難）き者を先にして独り後に獲るは、仁者の心と為す所以なり）

①『四書集注』論語・雍也・「問仁、曰、仁者先難而後獲、可謂仁矣」条の朱注に「〔程氏〕又曰、先難、克己也。為先、而不計所獲、仁也（〔程氏〕又た曰く、難きを先にするは、己に克つなり。〔難きを〕先と為し、獲る所を計らざるは、仁なり）」。

[破題上句:] 分破順破法なり。[破題下句:] なし。

[承題一句:] 合承・逆承なり。[承題二句:] 「先難後獲」に正還す。[承題三句:] 逆に「仁者」を我(伐: 補足)す（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十五葉・「破承題式」条）。

題目: 約之以禮（『論語』雍也）単題

君子有返約之功、而博文乃非泛驚矣^①。蓋禮即文之有旨者也、約之以此所博者、何慮其泛乎（君子、約に返るの功有り、而して博文は乃ち泛く驚くことに非ず。蓋し禮は即ち文の旨有る者なり、之を約し此れを以て博くする所の者あり、何ぞ其の泛くするを慮らん）

[破題上句:] なし。[破題下句:] 上文を我(伐: 補足)し以て「之」字を醒ます。

[承題一句:] ●●●●●●「之」字●●。[承題二句:] なし。[承題三句:] 「約」字に従うを以て上の「博」字を我(伐: 補足)す（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十五葉・「破承題式」条）。

題目: 有德者必有言（『論語』憲問）単題

徳可●言、聖人為有徳者信焉^①。蓋理得於心之謂徳、心發於聲之謂言、有徳無言必不爾矣（徳は言を●す可し、聖人、徳有る者は信(言)ありと為すなり。蓋し理の心に得るを之れ「徳」

と謂う、心 聲に發する之れ「言」と謂う、徳有りて言無きは必ず爾^{しか}ならず)

[破題上句・下句:] 破題は虚説するなり。

[承題一句:] 承題は透發するなり。[承題二句:] 極めて分明にして、極めて高●なり。[承

題三句:] なし (『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十五葉・「破承題式」条)。

題目: 今之愚也許而已矣 (『論語』陽貨) 単題

愚以行詐并愚、亦非古矣/夫愚未有能詐者也、而今人乃以詐為愚、古之愚尚可得耶 ([今の] 愚は詐を行なうを以て愚を并す、亦た古に非ず/夫れ愚は未だ能く詐る者有らざるなり、而して今人は乃ち詐るを以て愚と為す、古の愚 尚お得可けんや)

[破題上句:] ●心。[破題下句:] 「并」字は「而已矣」に連なりて、亦た出す。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] ●●●●不含● (『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十五葉・「破承題式」条)。

題目: 仁親以為寶 (『大學』傳第十章) 単題

亡人有不忍其親之心、而所寶得矣/盖存沒之際他人猶不忍釋然、況為其子者乎、宜孝子之独宝此也 (亡人 (亡命者: 晉の文公のこと) 其の親を忍びざるの心有り、而して寶とする所は得らる/盖し存沒の際は他人も猶お釋然とするに忍びず、況んや其の子と為る者をや、宜しく孝子の独り此れを宝とすべきなり)

[破題上句:] 「仁」字を破く。[破題下句:] なし。

[承題一句:] 情に入りて便ち人を動かす。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし (『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十五葉～元四十六葉・「破承題式」条)。

題目: 君子篤恭而天下平 (『中庸』第二十三章第五節) 単題

聖人不顯其敬、而天下化成矣/盖敬者天徳王道之本、不顯其敬而敬純矣、天下有不化成者哉 (聖人 其の敬を顯らかにせず、而れども天下 化成す/盖し敬なる者は天徳・王道の本なり、其の敬を顯らかにせずして敬 純なり、天下 化成せざる者有らんや)

[破題上句:] 「仁」字を分破す。[破題下句:] なし。

[承題一句:] 合承なり。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし (『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十六葉・「破承題式」条)。

題目: 巧言令色 (『論語』學而・陽貨) 兩扇題

心乎外飾者、觀 (觀) 其言色而可知矣/夫言而中理、色而近信、即不巧令可也、奈何世之務外者、必欲以巧令自飾 (外飾を心とする者は、其の「言」・「色」を觀 (觀) て知る可し/夫れ「言」にして理に中り、「色」にして信に近ければ、即ち「巧」・「令」ならざること可なり、

奈何ぞ世の外に務む者、必ず「巧」・「令」を以て自から飾るを欲せんや)

[破題上句:] 下を照らす。[破題下句:] 「巧」「令」を暗破し、題を扣(触れる)す。

[承題一句:] 反面なり。題の「仁」字を照らす。[承題二句:] 二句は正轉す。[承題三句:] なし(『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十六葉・「破承題式」条)。

題目: 加之以師旅, 因之以饑饉(『論語』先進) 兩扇題

内外交困, 任事者難矣/盖師旅饑饉有一焉則國不得安, 而況既加之矣, 又因^①之乎(内外交々^{くる}困しむ, 事に任ずる者は難きかな/盖し「師旅」・「饑饉」の一有れば, 則ち國 安きを得ず, 而して況んや既に「之に加え」, 又た「之に^{かさね}因る」をや)

①『四書集注』論語・先進・加之以師旅, 因之以饑饉 条の朱注に「因, 仍也(因は, ^{かさね}仍るなり)」。

[破題上句:] 題面を破く。[破題下句:] 下文を反し撃す。

[承題一句:] 此れ善く下を起こす。絶えて是れ神●の名手なり。[承題二句:] 那^{どこ}(哪)に此れ有るを得ん。[承題三句:] なし(『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十六葉・「破承題式」条)。

題目: 言思忠, 事思敬(『論語』季氏) 兩扇題

君子致思於言事, 可以徵至一之學焉/盖一而不貳之謂忠, 一而無違之謂敬, 是固言事之極也, 君子能弗思哉(君子 思いを「言」・「事」に致し, 以て至一の學を徵す可し/盖し一にして貳ならず之れ「忠」と謂う, 一にして違ふこと無し之れ「敬」と謂う, 是れ固より「言」・「事」の極なり, 君子 能く思わざらんや)

[破題上句:] 順破なり。[破題下句:] 特に解するなり。

[承題一句:] 説き来り, 又た●●●。[承題二句:] なし。[承題三句:] 「思」字を煞す(『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十六葉・「破承題式」条)。

題目: 人不知而不愠(『論語』學而) 兩截題

忘乎名之見者, 惟有說樂而已/盖心而有愠則說樂忘矣, 抑思人不我知, 初非有損于學也, 而又何愠乎(名^{あら}の見わるるを忘れる者は, 惟だ「説び」・「楽しみ」有るのみ/盖し心にして愠^{いきどお}り有れば則ち「説び」・「楽しみ」は忘れらる, 抑そも人の我を知らざるを思うも, 初めより學に損有るに非ざるなり, 而して又た何ぞ愠らんや)

[破題上句:] 題意を破く。[破題下句:] 「不愠」を暗破す。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 正●。[承題三句:] [破題の]「忘名(忘)名」の意にして, 「不愠」を醒出す(『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十六葉・「破承題式」条)。

題目：吾少也賤故多能（『論語』子罕）兩截題

聖人之多能，聖人之窮也／夫夫子即不少賤，未必不多能也，今推其故，於「少賤」亦姑託以辭聖云耳（聖人の多能は，聖人の窮まればなり／夫れ夫子は即ち少きとき賤きことならざれば，未だ必ずしも多能ならずんばあらざるなり，今 其の故を推すに，「少賤（少くして賤し）」に於いて亦た姑く「謙遜して多能に」託するに聖「といわれること」を辞するを以てす云うのみ）

[破題上句:] 逆破なり。[破題下句:] なし。

[承題一句:] 通翻す。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十六葉～元四十七葉・「破承題式」条）。

題目：仲尼日月也（『論語』子張）兩截題

聖之超於賢也，亦人所易見矣／夫在人為仲尼，在天為日月，不知仲尼，獨不見日月乎（聖の賢を超ゆるや，亦た人の見易き所なり／夫れ人に在りて仲尼と為し，天に在りて日月と為す，仲尼を知らずして，獨ぞ日月を見ざるや）

[破題上句:] なし。[破題下句:] ●不●。

[承題一句:] 字字超脱す。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし。

（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十七葉・「破承題式」条）。

題目：天下溺，援之以道（『孟子』離婁上）兩截題

援天下者，反其所由溺焉而可也／蓋天下無道故溺也，援之者不以道，是以溺之者援之而溺不救（天下を援う者は，其の溺るるに由る所に反して可なり／蓋し天下 道無きの故に溺るるなり，之を援う者は道を以てせず，是を以て之に溺るる者 之を援うも溺れて救えざるなり）

①溺れかかっている嫂（あによめ）を礼に反して手をとって援うのは権（臨機応変）の行為である。しかし溺れかかっている天下を援うのには，そうした権（臨機応変）の行いを用いなくてもよい。

[破題上句:] なし。[破題下句:] なし。

[承題一句:] 透●語。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十七葉・「破承題式」条）。

題目：舉直錯諸枉，則民服（『論語』爲政）相因題

舉錯順乎民心，民自無不服矣／夫好直惡枉民之常情也，果能舉直而錯枉，安有不服之民乎（「舉」・「錯」 民心に順なれば，民 自から服せざるは無し／夫れ直きを好み枉れるを惡むは民の常情なり，果して能く直きを舉げて枉れるを錯けば，安くんぞ服せざるの民有らんや）

[破題上句:] 句ごとに打通す。[破題下句:] 一句もて題を完る。

[承題一句:] なし。[承題二句:] 一句もて題に還（還）る。[承題三句:] なし（『文法小

『題濬靈秘書』初學破家格式・元四十七葉・「破承題式」条)。

題目：不亦說乎（『論語』學而）截上題

學中之趣，惟時習者喻之也/夫學而不說，必其所學者未熟也，自然則得心之趣，非時習者孰喻之（學中の趣（趣旨），惟だ時に習う者のみ之を^{さと}喻るなり/夫れ學びて^{よろこ}説ばざれば，必ず其の學ぶ所の者は未だ熟せざるなり，自から然れば則ち心を得るの趣（趣旨）は，時に習いし者に非ざれば孰れが之を^{さと}喻らん）

[破題上句:] なし。[破題下句:] 亦た●神。

[承題一句:] 「説」字に反し，上を我^{ママ}（伐：補足）す。[承題二句:] 「時習」を反我^{ママ}（伐：補足）す。[承題三句:] 「説」字に正還（還）す。●●虚●（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十七葉・「破承題式」条）。

題目：士志於道（『論語』里仁）截下題

士而志道，宜其專内^①於道矣/夫人之志不於道者，必非士也，士志於道，安有不心乎求道者乎（士にして道に志せば，宜しく其れ内を道に專にすべし/夫れ人の道に志さざる者は，必ず士に非ざるなり，士の道に志す，安くんぞ道を求めるを心とせざる者有らんや）

①『四書集注』論語・里仁・「士志於道」条の朱注に「程子曰，志於道而心役乎外，何足與議也（程子曰く，道に志して心は外に役せられれば，何ぞ與に議するに足らんや）」。

[破題上句:] 下を反拏す。[破題下句:] なし。

[承題一句:] 反筆して逆を用う。[承題二句:] 正●用順。[承題三句:] 下を拏^ひく（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十七葉・「破承題式」条）。

題目：雖欲勿用（『論語』雍也）截下題

以可用者而勿用，亦徒有其欲而已/夫物之可用者莫駢角，若也如欲勿用，果能使之勿用否（用うる可き者を以て用いること勿かれとするも，亦た徒に其の欲すること有るのみ/夫れ物の用うる可き者の駢^{あか}くして角^{つの}莫し，^{かくのとき}若なるや，用うること勿らんと欲するが如し，[しかし^{あか}駢^{つの}くして角があれば]果して能く之をして用いること勿からしむや否や）

[破題上句:] 以截●●。[破題下句:] 「雖」の字意を破く。

[承題一句:] ●●●截上。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし（『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十七葉～元四十八葉・「破承題式」条）。

題目：如用之（『論語』先進）截下題

禮樂不可漫用也，聖人因時論而轉計焉/盖舍己以徇^①（徇）人者，時人之用禮樂也，夫子於此能不為之轉計耶（禮樂は漫として用う可からざるなり，聖人は時に因りて論じて轉計（何度

も考える)す/蓋し己を捨てて以て人に狗(猢)う者は、時人の禮樂を用いるなり、夫子此に於いて能く之が轉計(何度も考える)を為さざるや)

①題目より截去された『四書集注』論語・先進の「子曰、先進於禮樂、野人也、後進於禮樂、君子也」条の朱注に「……蓋周末文勝、故時人之言如此、不自知其過於文也(……蓋し周末は文勝れり、故に時人の言此の如し、自から其の文に過ぎるを知らざるなり)」。

[破題上句:] 下を含みて題を扣(触れる)す。[破題下句:] 「如」字の神●を破出す。

[承題一句:] 下の「如」を反照す。[承題二句:] なし。[承題三句:] 正題なり(『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十八葉・「破承題式」条)。

題目: 雖孝子慈孫(『孟子』離婁上) 截下題

惡人不禁其有後、政所以絶之也/蓋幽厲所屬者孝子慈孫耳、然既為幽厲即予之以孝慈亦更不復有孝慈矣(惡人も其の後有るを禁ぜざるは、政もて之を絶つ所以あればなり/蓋し「幽」・「厲」[と諡されたものが]屬む所の者は「孝子」・「慈孫」なるのみ、然れども既に「幽」・「厲」と[いう諡と]為れば、即ち之に予うるに「孝[子]」・「慈[孫]」を以てするも亦た更に復た「孝」・「慈」有らず)

①『四書集注』孟子・離婁上・「名之曰幽厲、雖孝子慈孫、百世不能改也」条の朱注に「幽、暗。厲、虐。皆惡諡也。苟得其實、則雖有孝子慈孫、愛其祖考之甚者、亦不得廢公議而改之……(幽は、暗なり。厲は、虐なり。皆な惡諡なり。苟し其の實を得れば、則ち孝子・慈孫の其の祖考を愛するの甚しき者有りと雖も、亦た公議を廢して之を改むるを得ず……)」。

[破題上句:] 「雖」字は妙全なり。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] 合下而不侵●未●●●●。[承題三句:] なし(『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十八葉・「破承題式」条)。

題目: 君子易事而難悦(『論語』子路) 虛冒題

以事悦者觀君子、而有難(難)易之異焉/夫事之何以獨見其易、而悦之何以獨見其難(難)乎、正以其為君子耳(「事」・「悦」なる者を以て君子を觀て、而して「難(難)」・「易」の異なり有り/夫れ之に事うるに何を以て独り其の易きを見ん、而して之を悦しめるに何を以て独り其の難(難)きを見ん、正に其の君子為るを以てするのみ)

[破題上句:] 「難(難)」・「易」字正●●●●出。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] 「君子」に着眼し、「小人」を照出す(『文法小題濬靈秘書』初學破家格式・元四十八葉・「破承題式」条)。

題目: 大學之道(『大學』經) 虛冒題

人之大者學亦大、其道不可不審也/夫大學非小學比也、大人所入、大學安可不審其道乎(人

の稱を隆にするは、之を難しとするなり／夫れ「民の父母」とは隆名（盛名）なり、彼 賢者を進むるに慎まず、即ち此の能に幾からんと欲するか）

〔破題上句：〕なし。〔破題下句：〕「然後」醒。

〔承題一句:〕 なし。〔承題二句:〕 「然後」精神●●●●。〔承題三句:〕 なし（『文法小題
濟靈秘書』初學破家格式・元四十九葉・「破承題式」条）。

題目：女器也（『論語』公冶長）口氣題

賢者有可用之材，聖人以器許^①之焉／夫器亦人所難也^②，夫子以之許子貢，非謂其材之可用耶（賢者 用う可きの材有り，聖人 器を以て之を許む／夫れ器は亦た人の難しとする所なり，夫子 之を以て子貢を許む，〔そのことは〕其の材の用う可きを謂うに非ずや）

①『四書集注』論語・公冶長・「子貢問曰賜也何如」条の朱注に「子貢見孔子以君子許子賤，故以己爲問（子貢 孔子の君子を以て子賤を許むるを見る，故に己を以て問を爲す）」。

②『四書集注』論語・公治長・「子貢問曰賜也何如」条の朱注に「孔子告之以此，然則子貢雖未至於不器，其亦器之貴者歟（孔子 之を告ぐるに此れ（女は器なり）を以てす，然らば則ち子貢は未だ「不器（器ならず）」に至らずと雖も，其れ亦た器の貴き者なるか）」。

〔破題上句：〕 題意なり。〔破題下句：〕 題面なり。

〔承題一句：〕「器」字を承けて一筆す。〔承題二句：〕「女器也」に还（還）す。〔承題三句：〕
 題意を●明にす（『文法小題潜靈秘書』初學破家格式・元四十九葉・「破承題式」条）。

題目：禮義由賢者出（『孟子』梁惠王下）口氣題

以禮義歸賢者、將以責之也／孟自出之而自違之、天下之責之所聚也、然則以禮義之出歸賢者、其意豈為尊之^①也乎（禮義を以て賢者に歸するは、將に以て之を責めんとするなり／孟〔子〕）

自から之を出し而して自から之に違えば、天下の責むるの聚まる所なり、然らば則ち禮義の出づるを以て賢者に歸す、其の意は豈に之を尊ぶと為さんか^②）

①也乎：「勢いに順いて虚落するの辭なり」（『舉業辨字』歇語辭第七・三十七葉・「也乎」条）。

②題目「禮義由賢者出」直後の截去された下文に「而孟子之後喪、踰前喪、君無見焉（而るに孟子の後喪（母の喪儀）は前喪（父の喪儀）を踰えたり、君（魯の平公）見うこと無かれ）」とあり、朱注に「孟子 前に父を喪ひ、後に母を喪う。踰は、過ぎるなり。其の母に厚く父に薄きを言うなり」。

〔破題上句：〕なし。〔破題下句：〕題意なり。

[承題一句:] 方●題●●●●●●●●。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし（『文法小題濟靈秘書』初學破家格式・元四十九葉・「破承題式」条）。

題目：子張學干祿（『論語』爲政）記事題

學而干祿。賢者之心紛矣。夫祿所以彰學。學不可以求祿也。干祿如子張其心不亦紛乎（學び

て禄を干^{もと}むは、賢者の心 紛^{みだ}ればなり/夫れ禄は學を彰かにする所以なり、學は以て禄を求むる可からざるなり、禄を干^{もと}むること子張の如きは其の心 亦た紛^{みだ}れざらんや)

[破題上句:] 題面を破く。[破題下句:] 一句を斷ず。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] 一句もて一句を求む(『文法小題潛靈秘書』初學破家格式・元四十九葉・「破承題式」条)。

題目: 遇諸塗 (『論語』陽貨) 記事題

聖人之可遇、聖人之不可見也。/夫不遇於家而遇于塗、亦塗之人已耳、貨豈能見孔子哉(聖人の遇う可きも、聖人の見^まゆる可からざるなり/夫れ家に遇わずして塗に遇う、亦た塗の人なるのみ、[陽]貨 豈に能く孔子に見えんとするや)

[破題上句:] 先有●一方有此破妙。[破題下句:] 一句を斷ず。

[承題一句:] 妙字生生定句●●。[承題二句:] なし。[承題三句:] (『文法小題潛靈秘書』初學破家格式・元四十九葉・「破承題式」条)。

補注:

『文法小題潛靈秘書』は、本稿「清代八股文における破題・承題の作成法について」(1)・同 (2)・同 (3)・同 (4)を發表してから、新たに目録しえた資料である。そのため本稿の「(1) 破題の解説と用例」・「(2) 破題における代字」において、『文法小題潛靈秘書』の破題と代字についての解説は紹介できなかった。そこで、補注としてここで述べることにする。

まず、破題については、つぎのように説明される。

破題式

破題とは、本題の大意を説き破くなり。其の法 連上(上に連なる)する可からず、犯下(下を犯す)す可からず。語 上文を帯びるを之れ「連上」と謂う。語 下文を侵すを之れ「犯下」と謂う。漏題する可からず、罵題する可からず。題中の義理 未だ全てを破くを経ずを之れ「漏題」と謂う。題中の字眼 全然として寫出するを之れ「罵題」と謂う。

破題は只だ兩句を用う。兩句中に「明破」・「暗破」有り。「明破」は、明明と破出す。「孝弟」字あれば、「孝弟」と明破し、「道德」字あれば「道德」と明破するが如し、是れなり。「暗破」は、題面の字眼を將^もって暗暗と點換す。「孝弟」類は「倫」字を以て之に代え、「道德」類は「理」字を以て之に代えるが如き、是れなり。兩句中に又た「順破」・「逆破」有り。「順破」は題面の字眼に照らして、句は上より下がる。「學而時習之」(『論語』學而)の先ず「學」字を破き、次に「時習」を破くが如き、是れなり。「逆破」は、題面の字眼を將^もって下より上る。「其為人也孝弟」(『論語』學而)の先ず「孝弟」を破き、次に「為人」を破くが如き、是れなり。破題は兩句なり。或いは上句もて題意を破き、下句もて題面を破けば則ち上句は即ち題前なり。或いは上句もて題面を破き、下句もて題意を破けば則ち下句は即ち題後なり。是の故に破法(破題の書き方)は一ならず。上句もて章旨を領し、下句もて本題を講ずる者有り。上句もて本題を講じ、下句もて章旨を承くる者有り。上句もて全章を冒(総括)し、下句もて本題を破く者有り。上句もて本題を講じ、下句もて或いは推開す、或いは下を吸(含ませる)す、或いは直斷す、或いは虚托する者有り。要するに意を破く・句を破く・客を破くの三法より出でず。三者は、意を破くを上と為し、句を破くを之に次ぐとし、子^こ(客)を破くを下と為す。●の破有るは、面の眉目・堂の門戸あるが如し。冠冕を貴び、流刻を貴び、大雅を貴び、古律を貴び、刻劃を貴び、自然を貴ぶ。一毫の俗氣・滯氣も俱に來たり得ず。

破は氣概を要す。須らく馬首の高昂(高々と掲げ)とし、矯矯(高々と)と人を動かし、一見すれば便ち是れ良騎なるを知るが如くすべし。[そうすれば]方に通場を壓伏(壓倒)す(『文法小題潛靈秘書』破題式・

元三十九葉～四十葉)。

破題は、大意を説き明かすものである。その解法は、連上(上に連なる)するべきではないし、犯下(下を犯す)してもいけない。題目の上の出題範囲になっていない部分まで入れて破題を作ることを「連上(上に連なる)」という。題目の下に出題範囲になっていない部分を入れて破題を作ることを「犯下(下を犯す)」という。漏題してもいけないし、罵題してもいけない。題目のキーワードを解き明かさず破題を書くことを「漏題」といい、題目の文字すべて書き出すことを「罵題」という。破題はただ二句で形成される。「明破」と「暗破」がある。「明破」ははっきりと説き出す。題目に「孝弟」という文字あれば、破題で「孝弟」とははっきりと説き出し、「道德」の文字があれば「道德」とははっきりと説き出ようなのがそれである。暗破は題目の文字をそれとなく書き換える。題目に「孝弟」の意味をあらわす言葉があれば「倫」という文字に代え、「道德」の意味をあらわす言葉があれば「理」という文字に代えるというようなものがそれである。また、「順破」と「逆破」がある。「順破」は題目の文字にそって、上から下に説き明かす。「學而時習之」(『論語』學而)という題目であれば、まず「學」の文字から破き、つづけて「時習」を破くというようなものがそれである。「逆破」は題目の文字を下から上に説き明かす。「其為人也孝弟」(『論語』學而)という題目であれば、下の「孝弟」の文字から破き、つづけて上の「為人」を破くというようなものがそれである。破題は二句から成る。上句で題意(題目の意味)を破き、下句で題面(題目の主題)を破いたのならば、上句が題前となる。また上句で題面を破き、下句で題意を破いたのならば、下句が題後となる。つまり破題の書き方はひとつではないのである。上句で、題目を含む章全体を考慮し、下句で本題を解くものがある。上句で本題を解き、下句で題目を含む章全体の意味に及ぶものがある。上句で題目を含む章全体を総括し、下句で本題を解くものがある。上句で本題を解き、下句で開いたり、出題されない後文(下の部分)を含ませたり、ただちに断定したり、または仮託するものがある。つまりは意味を破く、句を破く、主でないもの(客)を破くの三つから出るものではない。そのうち、意味を破くのを上とし、句を破くのはそれに次ぎ、子(客:主でないもの)を破くのを下とする。破題があるのは、顔に眉目があり、家に門戸があるようなものである。立派な姿で、文がすっきりとし、高尚であり、典雅であり、はっきりとし、自然であることが賞ばれる。すこしの俗気・すっきりしない気配も持ち込むことはできない。破題は気品が必要である。馬首をたかくかけ、高々と人を動かし、一見してすぐれた騎手であると知らしめるようにすべきである。そうすれば、試験で他を圧倒できるのである、という。

また、破題における虚字は、つぎのように説明される。

破題の虚字煞法: 破題の正格は只だ兩句を用う。兩句の中の上の一句は虚字煞脚を用いず。下の一句は方に虚字を用う。「也」字・「矣」字・「焉」字・「者也」字・「者焉」字・「者矣」字・「而已」字・「而已矣」字の如きは俱に用いる可し。「乎」・「哉」・「耶」・「坎(歟)」字に至りては、断じて用う可からず(『文法小題潜靈秘書』破題式・四十一葉)。

破題の正格はただ二句で作成する。上句には虚字を用いない。しかし下句では、「也」・「矣」・「焉」・「者也」・「者焉」・「者矣」・「而已」・「而已矣」などは用いることができる。「乎」・「哉」・「耶」・「歟」の文字は決して用いてはいけない、という。

なお用例については、承題とひとまとめとなっている。

破題の代字法についてはつぎのように述べる。

古今人名の破法: 孔子は「聖人」と破く。顔[子]・曾[子]・[子]思・孟[子]は「大賢」と破く。孟子は「亞聖」と破く。[孟子については]則ち須らく題[目]を相て之(「大賢」か「亞聖」)を用いるべし。閔子も亦た「大賢」と破く。其餘の孔子の弟子は俱に「賢者」と破く、或いは「賢人」と破く。兩賢 並び稱されれば、則ち「二賢」と破く。数人なれば、則ち「群賢」と破く、或いは「諸賢」と破く。子路は或いは「勇士」と破く。曾皙は或いは「狂士」と破く。其餘の従者・小子・二三子は俱に「門人」と破く。孟子の弟子も亦た「門人」と破く。堯は「唐帝」と破く。舜は「虞帝」と破く。堯・舜並び稱されれば、則ち「二帝」と破く、又た「古帝」と破く。禹は「夏王」と破く。湯は「商王」と破く。文[王]・武[王]は「周王」と破く。三代並びに稱されれば、則ち「三王」と破く。文[王]・武[王]並び稱されれば、則ち「二聖」と破く。伊尹・周公は「元聖」と破く。伯夷・叔齊は「古聖」と破く。齊桓[公]・晋文[公]は「霸主」と破く。魯哀公は「魯君」と破く。衛灵(靈)公は「衛君」と破く。齊景公は「齊君」と破く。戦国の齊・梁の諸々の君は、則ち「時君」と破く。孔文子・公叔文子は俱に「衛大夫」と破く。子産は「鄭大夫」と破く。其餘は各々註中の某国某大夫に依

りて之を破く。三家・陽貨・王孫賈等は「權臣」と破く。儀封人・陳司敗・太宰等の凡そ官爵有る者は皆な「時官」と破く。師冕・[大] 師 [の] 摯・師曠等は「樂官」と破く。林放・微生高は「魯人」と破く、亦た「時人」と破く。微生畝・長沮・桀溺・荷蕢・丈人等は俱に「隱士」と破く。楚狂 [接輿] は「狂士」と破く。原壤・告子・許行・夷之は則ち「異端」と破く。其の餘の君子・小人は則ち仍お「君子」・「小人」を以て之を破く。註中に「人」と稱し・「民」と稱するは則ちを「人」・「民」以て之を破く。其の餘の一切の鳥獸草木器用等の物は則ち俱に物字を以て之を破く。此れ皆な一定の法なり。錯乱す容(べか)らざる者なり。熟玩類推すれば、破題の法 脩(備) 備われり(『文法小題潛靈秘書』破題式・元四十葉～四十一葉)。

聖人: 孔子

大賢: 顔子・曾子・子思・孟子・閔子

亞聖: 孟子。題目から「大賢」か「亞聖」のどちらを用いるか決める

賢者もしくは賢人: 上記以外の孔子の弟子

兩賢: 孔子の弟子二人を並列して指す時

羣賢・諸賢: 孔子の弟子数人を指す時

勇士: 子路

狂士: 曾皙

門人: 孔門の従者・小子・二三子と孟子の弟子

唐帝: 堯

虞帝: 舜

二帝: 堯・舜を並べて指す時

古帝: 堯・舜を並べて指す時

夏王: 禹

商王: 湯

周王: 文王・武王

三王: 三代を並べて指す時

二聖: 文王・武王を並べて指す時

元聖: 伊尹・周公

古聖: 伯夷・叔齊

霸主: 齊桓公・晉文公

魯君: 魯哀公

衛君: 衛靈公

齊君: 齊景公

時君: 戦国時代の齊・梁の諸々の君

衛大夫: 孔文子・公叔文子

鄭大夫: 子産

その他は注で某国某大夫という表現にしたがう。

權臣: 陽貨・王孫賈

時官: 儀封人・陳司敗・太宰などのすべて官爵を有する者

樂官: 師冕・[大] 師 [の] 摯・師曠など

魯人・時人: 林放・微生高

隱士: 微生畝・長沮・桀溺・荷蕢・丈人など

狂士: 楚狂 [接輿]

異端: 原壤・告子・許行・夷之

君子・小人: 君子・小人とあるのにしたがう

人・民: 注で「人」・「民」というのにしたがう

物: 上記以外の鳥獸草木器用などの物

(つづく)